

学生の意識を変える異文化理解教育の試みと提案 —ステレオタイプ解消に向けて—

フィゴーニ啓子

Abstract

This paper provides rationale for the importance of teaching intercultural understanding to university students. The author surveyed 98 first-year English majors at Mukogawa Women's university who go to the US to study for 4 months in their second year. In a preliminary part of the survey, the students shared their perception of America and Americans. In the next step of the project, the author gave a presentation titled "What is important in understanding other cultures and people?" to the students. The purpose of the presentation was to provide examples of stereotypes, and highlight difficulties in understanding people from other cultures. Following the presentation, the students were given a questionnaire in which they were asked to reflect on and uncover some of their own stereotypes. Based upon the results of the questionnaire, the author discusses how the students' attitudes and awareness changed towards other cultures and people.

キーワード：異文化理解教育、ステレオタイプ、多文化共生社会、異文化トレーニング

1. はじめに

昨今、政治、経済、情報等のグローバル化が進む中、我々は、日常的に、国内外を問わず、外国人、外国文化と接触、交流する機会が増えている。特に、

日本国内で、異文化接触が日常的に起こり、実際に刻々と異なる文化の人々に対応していかなければならない状況が生じている（八代，2005，99）。いわゆる多文化共生社会の到来である。

大学においては、海外の大学との研究、教育の推進をめざして学術協定の促進、ネットワーク化、留学プログラムの充実、留学生の受け入れの促進および日本から外国の大学への留学生増加計画など「大学の国際化戦略」を展開し、学生の「異文化間リテラシー」¹の獲得に努めている（山田，2009，17）。このような現状の下、大学の英語教育は、語学教育の更なる充実とともに、語学と密接につながっている文化への理解、つまり異文化理解教育の充実を喫緊の課題として取り組むべきであろう。なぜなら、現代の四年制大学において、異文化関連の授業は少数であり、内容も多岐にわたっていることが、異文化間教育学会の調査（2004）で明らかとなった。それによると、異文化間関連科目は、教養課程に26.2%、専門教育課程に31.3%、教職に22.9%という状況で、多数は、「異文化」という名称を付けた科目であるが、「日本」「国際」「多文化」といった名称の科目もあり、国際理解教育から日本事情と幅広い領域を包摂しているという（山田，2009，13）。一方、川村（2000）は、日本の異文化理解教育の歴史は浅く、確固たる方法論がない状況だと指摘している。

では、今後の日本の異文化理解教育はいかにあるべきか、その方向性を模索するために、海外の異文化理解教育の現状や内容を考察してみたい。

海外の英語教育の分野（IATEFL²）では、異文化理解教育は重要な位置づけとなっている。教材、異文化トレーニング、テスト、教員の見解、現存の言語モデル有効性等へのアプローチに関しての研究が盛んに行われていて、‘cultural awareness’，‘knowledge’，‘attitude’，‘behavior/performance’ がキーワードとなり、学習者の ‘intercultural competence’ の育成を目指している。

また、異文化理解教育、国際理解教育は、「開発教育」、「グローバル教育」、「ワールドスタディーズ」などと呼ばれ、ユニセフの「開発のための教育」の概念を基礎として、相互扶助の立場から、文化、人権、環境、平和などに関する幅広い内容を学習する教育としている。それぞれの国の事情に応じて『開発のための教育』『ワールドスタディーズ』『Global Teacher, Global Learner』など代表的なテキストが用意されているが、中心的な課題は、「ステレオタイプ」、いわゆる、イメージと認識の問題として位置づけられている点が共通している

と川村（2000, 204）は述べている。

異文化理解教育の実践に向けて、ステレオタイプの問題が根本的な課題であることは当然であろう。社会心理学の説では、人間にとってステレオタイプ化は自然の行動で、一度形成されると、例外は無視してしまい、意図的に抑えようとしなない限りは、解消するのが難しく、感情が加わると偏見が生じ、行動が伴うと差別へとつながる（上瀬, 2002）という。ステレオタイプが内包する問題点を認識し、解消に努めないと、異文化理解が異文化誤解へと変わってしまうだけでなく、偏見や差別にまで発展する可能性があり、延いては、多文化共生時代において望まれる相互理解や平和的共存を脅かしかねない。

また、ステレオタイプの問題への対応だけではなく、異文化理解に必要な態度や姿勢の育成も考慮されるべきであると考えている。グローバル化が進む近年においては、文化は、もはや不変で永続性、純粋性が保たれず、雑種的で異種混合的で、変容する／変容しうるものである（丸山, 2007）。河原（2000, 268）は、「多文化共生社会では、各民族の持つ文化伝統が互いに影響しあい、各民族が変容していく社会である」と指摘している。しかるに、変容しうる社会、文化に対応できる「柔軟性」、異種混合的な他文化を理解し、受け入れる「開放性」や「寛容性」、変容する他文化と自文化を相対的に捉えるための「客観性」といった態度や姿勢が必須となるであろう。多文化社会では、全ての民族、文化についての情報や知識に精通し、共生共存することには限界がある。知識も大事ではあるが、先に述べた態度や姿勢があれば、例えば誤解や摩擦が起きたとしても、客観的に問題点を捉え、柔軟に対処し、相手にオープンな態度で寛容に接することで、平和的解決につながる可能性がある。

筆者は、ステレオタイプの問題や異文化に対する姿勢、態度の育成が異文化理解教育にとって重要な課題だと位置づけ、その課題を視座にした異文化理解教育の実践を行った。対象は、アメリカ、ワシントン州でのフォートライト研修を控えた英文科一年生である。「異文化理解とは何か」という題名のプレゼンテーション後、学生の考えや意識を調査するためアンケートをとった。本稿では、そのアンケート結果を分析し、学生のアメリカ人に対するステレオタイプや異文化意識がどのように変化したのかを検証する。そして、大学の英語教育における異文化理解教育について論考したい。

尚、異文化に対するステレオタイプの先行研究の多くは、英語母語話者と接

触経験が少ない一般の日本人や日本人大学生を対象者としているのに対し、本稿のリサーチ対象者は、平成生まれの英語専科の学生で、約7割が、中学以前に小学校や英会話スクール等で英語を学び、英語母語話者と接触経験がある。そして、約6割が、大学入学前に英語国でのホームステイや短期留学を経験している。従って、英語、英語文化に興味、関心が高く、英語母語話者との接触経験が豊かである学生が対象者であるという点で、貴重な研究例になると思われる。本研究が、大学の英語教育、英文科における異文化理解教育への一つの示唆になることを願う。

2. 先行研究

日本人が外国人に抱くステレオタイプに関する研究は数多くあるが、その中で、日本人が抱くアメリカ人に対するイメージの研究に注目したい。我妻と米山（1967）は、10代から60代までの日本人男女270名を対象に調査を行った。結果は、1位 陽気だ、2位 愛想がよい、3位 行動的、4位 進歩的、5位 個人主義的であった。中村（1995）は、日本人大学生を対象にした調査で、大学生はアメリカ人の自主性、社交性を高く評価したと結論づけた。川村（1995）は日本人高校生132名にアンケートを取った結果、cheerful（34名）が最も多く、次に free（22名）、3番目に easy-going（12名）、次いで patriotic（9名）、friendly（8名）と続いた。これらを総合すると、60年代の幅広い年齢層の日本人と90年代の若者は、アメリカ人は、陽気で、愛想があり、積極的で、社交的だという肯定的であるが一面的なイメージ持っていることがわかる。時代、世代が異なっても、アメリカ人に対するイメージに大差がないといえるだろう。

次に、日本の大学生を対象に、ステレオタイプ、偏見の解消、低減の実践を試みた研究を紹介する。Clark（2003）は、英語コミュニケーションの授業でアメリカ映画の中で表象されるネイティブアメリカンや日本人のイメージを題材にしたビデオを使用し、既知の知識や常識、先入観の再確認や検証、映像、イメージの分析、ディスカッションを通して、学生のステレオタイプ、偏見を認識させただけではなく、多様性に対する寛容性の育成も試みた。90分授業 3

回の実践後、学生は、ステレオタイプの問題点の認識のみならず、他文化や自文化に対して深い興味や気付きを持ち、相対的な考察ができるようになったという。また、学生の異文化に関する意見や考えが、実践前に比べると、より熟考された深いレベルに変化したと報告している。しかし、何%の学生が、どの点において変容したのかということが明示されていなかったため、筆者の今回の実践においては、可能な限り具体的な数字で表し検証した。

3. 異文化理解教育の実践例

1) 実践回数と時間

今回の異文化理解教育の実践は、90分のリスニング演習のクラス内で行った一度だけの試みである。

2) 対象者

武庫川女子大学英文科一年生110名（有効回答数98名）である。98名の内60名は、大学入学前に、英語圏での旅行や短期留学、ホームステイプログラム参加などの経験がある。行き先は、アメリカ29名、オーストラリア18名、カナダ6名、イギリス5名、ニュージーランドが2名であった。イギリス5名のうち1名は幼少の頃に2年以上滞在した帰国生で、オーストラリア18名のうち2名が半年以上1年未満の短期留学経験者である。残りの57名は半年未満の滞在経験を持つ。海外経験なしの学生38名の内18名には、国内に外国人の友人、知り合いがいた。友人らの出身国に関しては、英語圏だけでなく、アフリカ、イラン、フィリピン、中国、韓国など様々である。

3) 実践のねらい

- ・ステレオタイプの意味を理解させること。
- ・学生が抱く英語母語話者に対する見解がステレオタイプ的であるかどうか気付かせること。アメリカ留学をする学生が対象なので、学生が抱くアメリカ人やアメリカ社会に対するステレオタイプや偏見を例に、ステレオタイプ、偏見、差別の関係性を認識させること。

- ・日本在住の外国人に対する日本人の態度を知ることから、各自の外国人に対する考えや態度を省察すること。そして、客観的な視点と柔軟で開放的な姿勢や、他者、他文化に対する寛容な態度が大切であることに気づかせること。
- ・他文化を理解することから、自文化、そして自分自身を客観的に見つめなおし、相対的な見方ができるようにすることと、相互理解に向けた望ましい関係作りを模索させること。

4) 授業手順

この実践授業の構成は、①事前調査実施、②教員によるプレゼンテーション、そして③プレゼンテーション後のアンケート実施となっている。ステレオタイプの意味とその危険性、ステレオタイプにおける偏見や差別の構造を学生に理解させ、自己気づきに結び付けるために、異文化トレーニングでよく採用される、認知、情意、行動面に働きかける形式⁴で進めた。

① 事前調査の内容と実施方法

実践授業ではまずアンケート用紙（Appendix 参照）を配布し、海外研修、外国旅行などの経験の有無やその訪問地と期間、外国人との交流経験の有無について記入させた。また、学生が抱くアメリカ人像のステレオタイプ、偏見を測定するために、「イメージによる測定」³を用いて、アメリカ人の外見と国民性について思い浮かぶ特徴を自由に書かせた。次に、ペアで、互いの記述内容についてディスカッションさせ、自分の考え、知見を確認させると同時にクラスメートがどのようにアメリカ人をイメージしているのか考察させた。その後、前年度の学生の回答を紹介し、アメリカ人像に対する偏ったイメージを指摘した。学生は自分の回答と照らし合わせながら、ステレオタイプの意味を認識した（認知）。

② 教員によるプレゼンテーションの目的、内容、実施方法

学生がステレオタイプ、そして自分の偏見について「認知」した後、さらにステレオタイプの危険性を理解させるために「本音と建前」「日本在住のALT が不快に感じる発言例」「『外人』とは？」というタイトルで、筆者の経験や知見から得た具体例を紹介するプレゼンテーションを実施した。この具体例というのは、異文化関連書物と筆者の20年以上のアメリカ人配偶者との結婚生活や二つの文化での生活を通じた経験や知見をもとにしている。

③ プレゼンテーション後のアンケート内容と実施方法

教員によるプレゼンテーション後、学生はアンケート用紙に異文化摩擦、誤解の具体例それぞれについての感想を書いた（情意）。アンケートの中には、今後の学生の異文化に対する態度、姿勢を問うために「異文化に対してどのように接することが望ましいか」という質問を加えた（行動）。さらに学生の思い出に残る異文化体験談についても記述させた。記入を終えた学生は、それぞれ自由に周囲のクラスメートとアンケートについて話し合った。但し、時間不足により、学生同士のディスカッションや教員と学生との意見交換等は十分にはできず、翌週の授業において、教員は、学生のアンケートのコメントに対してフィードバックをした。

4. 事前調査結果

4.1 学生のアメリカ人に対するイメージ：身体的イメージ

異文化の対象国がアメリカだという理由で、学生の意識調査をする際には、アメリカ人と交流経験がある学生32名（これより「交流あり」と表記する）と交流経験がない学生（これより「交流なし」と表記する）66名に分けて結果（複数回答可）を出してみた。アメリカ人と身近に接していた学生とそうでない学生に明らかな違いがあるのか考察してみたい。

交流あり：1. 体格がよい59%（19名） 2. 背が高い50%（16名） 3. 髪の色が違う28%（9名） 4. 眼の色が違う18%（6名） 5. 鼻が高い15%（5名） 6. かっこいい、スタイルがいい、きれい6%（2名） 7. 肌の色が違う、多様な人種6%（2名）

交流なし：1. 体格がよい59%（39名） 2. 背が高い54%（36名） 3. 鼻が高い24%（16名） 4. 眼の色が違う22%（15名） 5. 髪の色が違う19%（13名） 6. かっこいい、スタイルがいい、きれい9%（6名） 7. 肌の色が違う、多様な人種7%（5名）

| 身体的イメージ | 交流あり (32名) | 交流なし (66名) |
|--------------------------|------------|------------|
| 1. 体格がよい | 59% (19名) | 59% (39名) |
| 2. 背が高い | 50% (16名) | 54% (36名) |
| 3. 髪の色が違う | 28% (9名) | 19% (13名) |
| 4. 眼の色が違う | 18% (6名) | 22% (15名) |
| 5. 鼻が高い | 15% (5名) | 24% (16名) |
| 6. かっこいい、スタイルがいい、 きれい | 6% (2名) | 9% (6名) |
| 7. 肌の色が違う、多様な人種 | 6% (2名) | 7% (5名) |

交流あり、なし両グループともアメリカ人像を、「体格がよい、背が高い、髪、眼の色が違う、鼻が高い」と挙げていて、「肌の色が違う、多様な人種」という意見が両グループとも少なかった。このことから、アメリカ人の身体的イメージは、白人、黒人、アジア人など多様な人種というより、アメリカ人を典型的なアングロサクソン系白人とする傾向が強いと推測できる。

4.2 学生のアメリカ人に対するイメージ：国民性のイメージ

交流あり：1. フレンドリー 59% (19名) 2. 自己主張する 50% (16名) 3. 陽気で明るい 31% (10名) 4. ポジティブ 28% (9名) 5. ストレートに言う 18% (6名) 6. 差別する 9% (3名) 7. ルーズ、おおざっぱ 6% (2名)

交流なし：1. フレンドリー 40% (27名) 2. 陽気で明るい 31% (21名) 3. ストレートに言う 18% (12名) 4. 自己主張する 16% (11名) 5. 自由だ 10% (7名) 6. ルーズ、おおざっぱ 9% (3名) 複数回答可)

| 身体的イメージ | 交流あり (32名) | 交流なし (66名) |
|--------------|------------|------------|
| 1. フレンドリー | 59% (19名) | 40% (27名) |
| 2. 自己主張する | 50% (16名) | 16% (11名) |
| 3. 陽気で明るい | 31% (10名) | 31% (21名) |
| 4. ポジティブ | 28% (9名) | 0% (0名) |
| 5. ストレートに言う | 18% (6名) | 18% (12名) |
| 6. 差別する | 9% (3名) | 0% (0名) |
| 7. ルーズ、おおざっぱ | 6% (2名) | 9% (3名) |
| 8. 自由だ | 0% | 10% (7名) |

両グループとも、アメリカ人に対しては、否定的なイメージよりも好意的なイメージを多く持っていることがわかる。また、「自己主張をする」「ストレートに言う」という意見も多かったことから、アメリカ人は「はっきりと意見を述べる」イメージも強く持っているようだ。否定的なイメージの記述で特筆すべき点は、「差別する」が、交流なしのグループではなかったのに対し、交流ありのグループでは約1割弱あった。これは、実際に接触、交流することで、差別された経験または、差別現場を目の当たりにしたのではないかと推測する。アメリカ人に対するイメージの先行研究結果と比較して、英文科の学生の多くが一番に「フレンドリー」を挙げているが、「陽気で明るい、社交的」という肯定的なイメージが多かった点については、先行研究とほぼ同じといえよう。このことは、時代や年齢の違い、対象言語、対象人種に対する興味、接触の有無に関係なく、日本人のアメリカ人に対するイメージは類似していると言えるだろう。

5. プレゼンテーションに対する学生のコメント

プレゼンテーションが学生に与えた影響を検証するため、学生のコメントを「情意、認知、行動」の領域に分類した。

5.1 「本音と建前」についての学生のコメント

「本音と建前」については、日本人特有の概念とされているが、アメリカ人も円滑な人間関係を築くうえで、常に本音で話しているわけではないということを、筆者の体験談やアメリカ映画のエピソードを交えて説明した。それに対して、81%（26名）の交流ありの学生と82%（54名）の交流なしの学生は、アメリカ人も「本音と建前」を使うことに驚き、意外に感じていた。両グループとも「直球タイプだから」、「Yes/No がはっきりしているから」、「はっきり物を言うから」「正直だから」「自己主張するから」「フレンドリーだから」といったアメリカ人に対するステレオタイプ観からくる表現を使って、「アメリカ人には本音と建前がないと思っていた」と記述していた。交流経験の有無にも拘わらず、対象者がステレオタイプのイメージをもっている限り、意見に大きくない違いがないのがわかる。

次に、交流あり、なしのグループ98名をまとめたコメントの結果を示す。

《情意面》 76%（73名）

- ・驚いた。外国人だからといって遠慮せずにはずばずと言えるわけではないんだ。
- ・アメリカ人や外国人はもっとオープンだと思ってたから意外だった。
- ・アメリカ人が表に出さない部分にすごく驚いた

《認知面》 35%（35名）

- ・具体的な話を聞いて、思い込みは危険だとわかった。
- ・人種の違いで性格が決まるのではなく、アメリカ人にも日本人と同じくいろんな性格の人がいるんだと思った。
- ・アメリカ人は思ったことをストレートに言う人たちという固定観念があったが、人の根本は同じなんだと思った。

《行動面》 28%（29名）

- ・相手の表面的なところだけで判断しないように気をつける。個人、個人をしっかりと見ていきたい。
- ・相手の立場に立って考えることが大切だと思った

無回答 3 % (3名)

情意面のコメントが多かったのは、アメリカ人に対する学生の思い込みの強さと実際のギャップを理解したからではないかと考える。

5.2 「日本在住の ALT が不快に感じる発言例」についての学生のコメント

「日本語がお上手ですね」等、ALT など外国人が不快に感じる日本人の言語行動 (McConnell, 2000) を紹介し、日本人の常識、良識を覆す ALT の発言例から、自文化、他文化を相対的にみることの重要性を理解させた。

《情意面》 56% (55名)

- ・褒め言葉が不快感を与えているのを知ってショック。
- ・私は褒められたらうれしいのに…
- ・相手を不快にしたなんて、とても意外。

《認知面》 22% (22名)

- ・最初はなぜこれらの言い方が失礼なのかわからなかったが、私たちの外国人に対するステレオタイプが嫌なんだとわかった。
- ・日本人からすると相手が喜ぶだろうと思っていうことが時に相手を傷つけているのだなあと思った。
- ・珍しいものを見るように見られるのが嫌だということが分かった。

《行動面》 10% (10名)

- ・私も英語が上手ですねと言われたら馬鹿にされた気になるので、言葉には気をつけた。
- ・自分もつい言ってたことなので気をつけようと思った。

無回答 2 % (2名)

ここでも、情意面のコメントが多かったが、相手を褒めているのになぜ不快に思われるのかと困惑している内容ばかりで、自分の常識や良識が覆された

ショックの大きさが表れているといえる。また、認知面では、相手の立場に立ったコメントや、行動面では、よく言う発言なので気をつけたいという記述が目立ち、相手への共感や思いやり、客観性の重要性を示唆しているといえよう。

5.3 「『外人』とは？」についての学生のコメント

『外人』＝白人、アメリカ人だと思い込んでいる例、日本人以外はすべて『外人』だという見解、国籍が日本である国際児に対する偏見、いじめの事例を通して、ステレオタイプのみならず自文化中心主義への警鐘を鳴らした。

《情意面》 8%（8名）

- ・（国際児について）日本で生まれ育って同じように生活しているのに外見が違っただけで差別されたり、じろじろ見られたりするのはおかしいし、悲しいなと思った。
- ・先生のお子さんの話を聞いて悲しかった。国際児であることは誇らしいことだと思ったが、本人にとっては辛いことがあったんだと知って驚いた。

《認知面》 8%（8名）

- ・国際児や外国人を見かけると見てしまうが、そんなに嫌なことだとは思わなかった。
- ・私も、白人＝アメリカ人というレッテルを貼っていた。
- ・町で外国人を見かけた時、かっこいいなとじろじろみてしまうが、見られている側の気持ちになるとつらいだろうなと思った。
- ・日本人以外を外人と言った。言われている人のことを考えたことがなかった。

《行動面》 70%（69名）

- ・私もこの前、駅で外国の方に質問されて答えている時に周囲からの視線がすごかった。その時いい気持ちがしなかった。私は人にこんなことをしたくない。
- ・白人＝アメリカ人だと思ってた。自分も中国人、韓国人に思われるのは嫌なので気をつけたい。

- ・見た目で人を判断していたので気をつけたい
- ・「ハーフ」は差別用語、外人をじろじろ見てしまうこと、外国に行けば自分が外国人だということなど今後気をつけようと思う

無回答 4% (4名)

圧倒的に、行動面への記述が多かったのは、外国人や国際児に対する自分の態度、姿勢に思い当たり、反省すべきだと認識し、相手を思いやる気持ちが生じたからであろう。一方、9% (9名) の学生が、「白人＝アメリカ人と思っっている日本人が多いが私はそうではない。小、中時代に『外人』という言葉はよくないと習ったので使わない習慣ができている」、「高校時代の ALT の先生に『外人』と使ってたので怒られたことがあった。以後、『外人』という言葉に気にしてる」というコメントを書いていた。1割の学生が、比較的、外国人に対してセンシティブな姿勢や考えを持っていることがわかる。文面から、小、中、高時代に受けた異文化教育や異文化経験が反映されていることわかる。

5.4 「今後、外国人、外国文化に対してあなたはどのように接していきますか？」という問いに対する学生のコメント

ここでは、学生がプレゼンテーションで学んだこと、感じたことが、行動面にいかに影響を与えたかが示唆される。

《自戒、反省をこめたコメント》 56% (55名)

- ・外国人に対して、この短時間でものすごくイメージが変わった。ステレオタイプ的な見方に注意して、差異だけでなく共通点にも目を向けたい。
- ・今まで外国人と接する機会がほとんどなく自分とは別世界だと考えていた。留学にあたり語学だけでなく文化についても学ばなければならないと思った。

《積極的に異文化と交流していきたいというコメント》 31% (30名)

- ・国ではなく、個人として相手を見て、互いにプラスになるようかかわっていききたい。
- ・ステレオタイプにはまって自分中心で物事を考えないようにしたい。外国人

ではなく一人の人として接したい。ボーダレスな世の中になってきた現代だから、自分とは関係ないといって線引きせず、広い目と心を持って異文化やコミュニケーションの理解に努めていくべきだ。

無回答 13% (13名)

自戒、反省を込めたコメントが多かったのは、学生が自分の中のステレオタイプを深く認識できたためではないだろうか。そして、異文化に対して積極的でオープンな態度が大切だと認識した3割の学生のコメントから、寛容性、開放性、柔軟性、客観性の態度が見られ、自文化中心主義の危険性を示唆するコメントも見られた。

6. 考察と示唆

今回の調査対象である学生の多くは、幼少のころから英語や英語文化に接触しており、外国人との交流機会も多いが、アンケート結果から、殆どの学生が一面的なアメリカ人のステレオタイプ像を持っていたことがわかった。また、交流あり、なしの学生のアンケート結果においても大きな違いがなかった。このことは、対象文化との接触の多さや関心の高さだけでは、ステレオタイプが解消されず、相手を正確に捉えられていないということを意味している。

今回の筆者によるプレゼンテーション実践後、85%の学生(84名)が、自分のステレオタイプや偏見、その危険性に気づき、内省したコメントを書いていた。アメリカ人(または外国人)と日本人は別だという自文化中心主義の考えが、連続性がある同じ人間であり、相違点だけではなく共通点もあることを認識し、今後、相手を傷つけたり、失礼のないように気をつけるという思いやりや、積極的な関係作りの重要性を示唆する記述も見られた。

しかし、アンケートのコメントの中に、少数ではあるが、アメリカ人と外国人を同じ枠組みでとらえて記述していた学生がいたことから、根強いステレオタイプや自文化中心主義の解消の難しさが浮き彫りとなったといえる。プレゼンテーションのねらいは、ある程度達成できたと言えるが、異文化理解教育の

継続が必要なのは言うまでもない。

さて、今回の実践から、大学の英語教育において、どのような異文化理解教育が望ましいといえるだろうか。山田（2009, 17）は、日本の場合、講義形式の知識習得を目的とする Top-Down Approach だけではなく、James（2005, 315）が提唱している個人の情緒面の発達や内面の省察につながる Bottom-Up Approach を強く薦めている。つまり、学習者の認知、感情、行動面に働きかける参加型、体験型学習で、自己気づきを促し、能動的に問題を考え、解決できる能力や、複眼的視点の育成、他者、他文化と友好的な関係作りを模索する態度や姿勢の育成を目指す実践的教育である。例えば、八代他（2009）は、ステレオタイプ解消法として、D. I. E. 法や、「友好的グループ間態度の形成法」など日本の状況にあった海外の異文化トレーニング⁵を紹介している。今後、海外の異文化トレーニングを参考に、日本の英語の授業に合う内容や方策に改良されたトレーニング、教授法の開発が望まれる。

7. 今後の課題

学生に書かせた事前調査は、「イメージによる測定法」のため、自由記述形式で、アンケート結果にやや正確さを欠いていると言える。例えば、アメリカ人の身体的特徴で、「肌の色が違う」と書いた学生がいたが、それは、白人、黒人を意味するのか、アジア、中東など様々な人種として捉えていいのか難しい面があった。今後、より学生の意識や考えが明確になるアンケート形式を考える必要がある。

また、アメリカ人と交流経験がある学生が、時間や関係密度がどの程度であったのかという点で明確に把握できなかったことも反省点である。

今回の実践が、学生の留学にどのような影響をもたらすのかということを引き続き検証していきたい。

8. おわりに

グローバル化が進み、日本を取り巻く環境が激変したにもかかわらず、日本人のアメリカ人に対する一面的なイメージが、半世紀の間、大きく変化していないということが本稿の調査でわかった。特に、今回の調査対象者は、一昔前の大学生とは違い、幼少期より異文化に関する豊富な情報に囲まれ、日常的に外国人と接触する機会があり、英語、英語文化への興味、関心も高く、英語国民との接触や英語国への訪問を経験している。それにも関わらず、アメリカ人に対するイメージは、昔と大きく変わらないのである。ステレオタイプの根強さの表れであろう。

情報や環境、時代が変化しても、ステレオタイプの解消が難しいのであれば、教育による意識改革しか方法がないのではないか。各大学において、異文化関連の科目、カリキュラム、教授法の確立に向けて、早急に対策がとられるべきである。まずは、異文化との距離が一番近い英語教育が、率先してカリキュラムや教授法の開発に取り組んでいくことが期待される。

注

1. 山田（2009, 16）は、多文化、異文化の知識、技能のことを異文化間リテラシーと定義づけている。
2. International Association of Teachers of English as a Foreign Language
3. ステレオタイプ、偏見の測定法の一つ。ここでは、3つの測定法のうち、第一の対象者について思い浮かぶ特徴を自由に想起してもらう方法である。
4. コミュニケーション能力や異文化トレーニングは、認知、情意、行動の3つの側面に分類されるというのが一般的な見解であると、小山、川島（2001）は指摘している。
5. D. I. E. 法の最初の提唱者は、Berlo, D.（1960）である。D は Description, I は Interpretation, E は Evaluation で、これら3つのステップを通して、誤解や自文化中心主義が絡むトラブル等の解決につながるという。「友好的グループ間態度の形成法」は、Brewer & Miller（1988）の三段階の方法であ

る。集団接触におけるステレオタイプを解消、低減する方法である。八代他の『異文化トレーニング』（2009）を参照。

参考文献

- 浅間正通 編著（2000）『異文化理解の座標軸』日本図書センター
- 伊佐雅子 監修（2007）『多文化社会と異文化コミュニケーション』三修社
- 川村義治（2000）「第7章 英語科における異文化理解教育をいかに創るか」
『異文化理解の座標軸』日本図書センター
- 中村真（1999）「日本人の人種・民族 ステレオタイプと偏見」『偏見とステレオタイプの構造と機能』至誠堂 87-98
- 西田司・クディカンスト W. B.（2002）『異文化間コミュニケーション入門』丸善
- 上瀬由美子（2002）『ステレオタイプの社会心理学』サイエンス社
- 山田礼子（2008）「異文化間教育25年間の軌跡」『異文化間教育27号』47-61
- 山田礼子（2009）「多文化共生社会をめざして」『異文化間教育30号』12-24
- 八代京子（2005）「異文化理解の教育とトレーニング」『異文化理解とコミュニケーション2』98-123 SANSHUSHA
- 八代京子・町恵理子・小池浩子・吉田知子（2009）『異文化トレーニング』三修社
- IATEFL 2009 Cardiff Conference Selections. IATEFL Darwin College. University of Kent.
- Clark, Charles. (2003). The Use of Film Comparisons to Teach about Cultural Stereotypes in the EFL Classroom. 近畿大学・視聴覚教育第3号, 1-14.
- James, Kieran. (2005). International Education: The concept, and its relationship to intercultural education. Journal of Research in International Education 2005; 4; 313

事前調査表

当てはまるものに○をつけてください。

1. あなたは海外研修、または外国に旅行に行ったことがありますか。
1. はい 2. いいえ

2. 1で「はい」と答えた人は、どこの国にどれぐらい滞在しましたか。
1. 英語圏（アメリカ・イギリス・オーストラリア・カナダ・ニュージーランド・その他（ ））
2. 英語圏以外の国（ ）
期間：一か月未満、半年未満、半年～一年、一年～二年、二年～五年、五年以上

3. 1で「いいえ」と答えた人は、今までに、個人的に外国人と友達、または知り合いになったことがありますか。
1. はい どの国の人ですか（ ）
2. いいえ

4. 「アメリカ人」に対してあなたが持っているイメージを3-5つ書いてください。
身体的特徴： 国民性：

5. 各トピックについて自由に感想を書いてください。
①ステレオタイプ：本音と建前（アメリカの嫁・姑、近所つきあい、PTA等）

②ステレオタイプ：外国人が不快に感じる発言例

③「外人」（白人＝アメリカ人？、アメリカ研修中の日本人学生、国際児）

6. 今後、外国人、外国文化に対してあなたはどのように接していきますか？

7. あなたの思い出に残る異文化体験談を書いてください。